

養殖の最新事情 山口・水産大でフードフェスタ

【下関】水産大学校は10月27日、山口県下関市の同校講義棟で「下関フードテクノフェスタ2018」を開いた。同校の研究開発・教育の成果を地域に還元し魚食に関する科学情報を発信する恒例行事。今年は日本水産の山下伸也執行役員中央研究所長を講師に招き、同校の山本義久准教授とともに最先端の養殖事情を紹介する講演会を開催した。

山本准教授は、魚にとって最適な人工の生態系が創出できる閉鎖循環式陸上養殖の特性について説明。氏が瀬戸内海区水産研究所勤務時代に開発したサイフォンの原理で潮汐（ちょうせき）による干出・浸漬を再現してろ過・酸素補給する閉鎖循環システムで、ウイルス性神経壊死症（VNN）を防除したキジハタ養殖の成果などを詳述した。

この他、沖縄栽培漁業センターでのヤイトハタの高密度養殖や、イスラエルで開発された微生物で循環用水を浄化するバナメイ養殖など世界の最新情報を開示しながら「日本は多様性に富む魚の種苗生産・養殖技術と地域特有の魚食文化を生かした養殖事業を通じて地域振興を図るべき」と持論を展開した。

山下所長は1988年にチリの合弁会社によるサケ養殖着業を振り出しに黒瀬水産のブリ、西南水産と金子産魚によるマグロ、弓ヶ浜水産のギンザケなどに至った「ニッスイの養殖の取り組み」を紹介。

この中で、ホルモンや光などを制御して生産サイクルをコントロールする種苗生産技術や石油掘削リグの応用技術や沈下式イケスなどを駆使した沖合養殖技術、微生物で浄化する用水中でバナメイを飼育する「Bioflocc養殖」など日本水産が採用する養殖先端技術を明らかにした。

その上で、「水産資源の持続的利用と海洋環境の保全に配慮しながら増え続ける世界の水産物需要を賄う養殖の可能性」について言及した。

（みなと新聞 2018. 11.2）